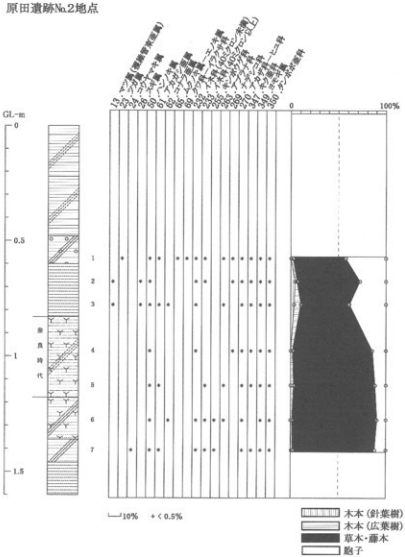
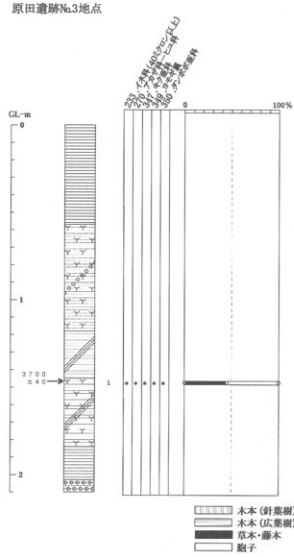
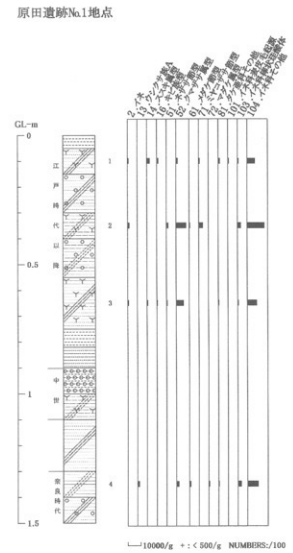


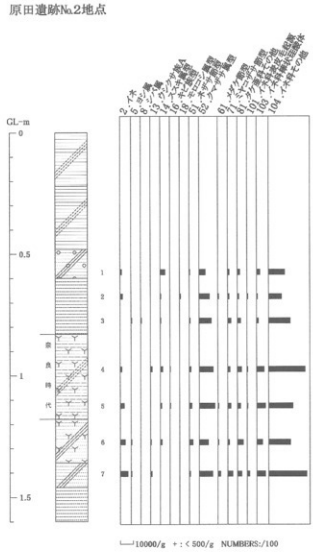
第3図　No. 2地点の花粉ダイアグラム



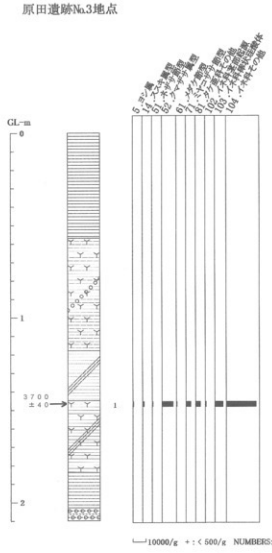
第4図　No. 3地点の花粉ダイアグラム



第5図　No. 1地点の植物珪酸体ダイアグラム



第6図　No. 2地点の植物珪酸体ダイアグラム



第7図　No. 3地点の植物珪酸体ダイアグラム

第5節　家ノ脇Ⅱ遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

大谷女子大学　　三辻　利一

全国各地の窯跡出土須恵器を大量に分析した結果、K、Ca、Rb、Srの4元素が有効に地域差を表すことが見つけられた。さらに、窯または、窯群間の相互識別法として、2群間判別分析法が適用され、有効であることもわかった。かくして、上記4元素を中心にして、2群間判別分析法が須恵器産地推定法として提案された。この方法はまず、窯跡数が少ない初期、古式須恵器の産地推定に適用された。5～6世紀代には、和泉陶邑に100基を超える窯跡が見つけられているにもかかわらず、地方では限られた地域に1～2基程度の窯跡が発見されているに過ぎない。この事実から、地方窯周辺の古墳出土須恵器が在地産か、それとも、外部地域からの搬入品かをみる2群間判別分析法の適用を考えた。もちろん、外部地域からの搬入品があるとすれば、その産地として、陶邑を第一候補に上げなければならない。こうした考え方から、地元窯と陶邑群間の2群間判別分析が行われ、陶邑産の須恵器が全国各地の古墳から出土することが明らかになってきた。

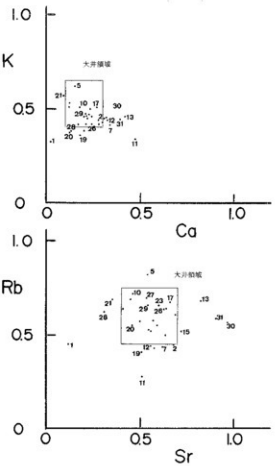
古墳時代がおわり、平安時代に入ると、須恵器は保存容器として日常生活に不可欠のものとなり、須恵器生産は各地に波及する。8～9世紀代の須恵器窯は各地で見つけられており、しかも、大井窯群のように数10基を超える窯跡がまとまる大規模な須恵器窯群が1県に1ヶ所ほどの割合で見つけ出されている。そこでの製品は「調」として、地方から平城京や平安京へ供給されることになる。須恵器伝播の流れは5～6世紀代とは全く逆流する訳である。

当然、この時期の須恵器産地推定法は初期、古式須恵器の産地推定法を若干、修正しなければならなくなる。この時期にはすでに、和泉陶邑での須恵器生産は衰退し、畿内周辺での須恵器生産の中心は兵庫県へと移り変わる。したがって、2群間判別分析の母集団として、陶邑は必要ではなくなる。むしろ、地元の大規模窯群が母集団の中心となる。大規模窯群での須恵器生産は個人経営によるものではなく、背後に地方官衙の存在があったものと推定される。当然、そこでの生産物は官衙を通して供給されていったものと推察される。ただ、この動きはこれまでのところ、殆ど把握されていない。むしろ、これから、大規模窯群の製品の伝播を通して明らかにされていく問題なのである。こうした考え方を持つ筆者は当然、松江市周辺の遺跡出土須恵器の産地推定では大井窯群を母集団の中心として2群間判別分析を行うことになる。家ノ脇Ⅱ遺跡出土須恵器の産地問題についても、大井窯群の製品が含まれているどうかという観点からデータ解析を進めた。

家ノ脇Ⅱ遺跡出土須恵器の分析データは表1にまとめられている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料、JG-1による標準化値で表示されている。このデータ表示のほうが両分布図を作成したり、統計計算をする上には便利である。表1のデータに基づいて作成した両分布図を第1図に示す。比較対照のために、大井領域を長方形で描いてある。半数近くの試料は大井領域に分布するが、残りの半数近い試料は大井領域外に分布することがわかる。この遺跡には、少なくとも数ヶ所の生産地の製品が供給されていたことを示している。大井群の製品を見つけ出そうとするとき、大井群を母集団の一つに選択した2群間判別分析を行わなければならない。ここでは、便宜上、出雲X群をもう一つの母集団として、2群間判別分析を行った。出雲X群とは出雲国庁跡から出土した須恵器の中に、20点ばかりの産地が特定出来ない須恵器集団があった。出雲地域内にあると想定さ

れたので、出雲X群としたのである。前もって、大井群と出雲X群との間の2群間判別分析が行われ、それぞれ、大井群、出雲X群への帰属条件が求められた。この判別図上に家ノ脇Ⅱ遺跡出土須恵器の計算結果をプロットした。その結果を第2図に示す。10点ばかりの須恵器が大井領域に分布し、大井窯群の製品が含まれていたことが判明した。一方、出雲X群の領域に分布する須恵器は1点もなく、出雲X群と同じ胎土をもつ須恵器は1点も含まれていないことがわかった。過半数の試料は不明領域に分布した。かくして、大井群産と推定された須恵器はNo.3、4、6、8、9、14、16、18、21、22、24、25の12点である。帰属が疑わしいNo.7、15、17の3点は大井群産？としておいた。産地不明となった試料はNo.1、2、5、10、11、12、13、19、20、23、26、27、28、29、30、31の16点である。産地推定の結果は表1の最右欄に示してある。また、この産地推定の結果を

第1図　家ノ脇Ⅱ遺跡出土須恵器の両分布図



両分布図上でも確認するため、第1、2図には産地不明となった試料には番号を付しておいた。これらの試料は第1図において、大井領域をずれており、産地不明となったことは十分理解できよう。産地不明となった試料の両分布図での分布をみると、Ca、Sr量が多いもの、少ないものがあり、さらに、K、Rb量が少なくて、大井領域をずれた試料もある。これらの試料の分布から、その生産地は1ヶ所ではなく、数ヶ所あることが推察できよう。

このように、産地不明の試料が相当数出たことは驚くに値しない。その理由は生産地がまだ、十分整理されていないことである。大井窯群自体、さらに多くの窯跡出土須恵器を分析して、大井群の化学的特性を明確にすることが必要であるし、地理的にも、どの辺までが大井群として掌握すべきなのかも明らかにすべきであろう。そして、大井窯群以外の小規模の窯群(数基単位の窯からなる)の所在と、その化学的特性の整理もまた、必要となる。これらのデータが整理されるにつれて、松江市周辺の遺跡出土須恵器の産地推定の正確度は上がってくるものと予想される。このように、今後、土器の考古学は土器形式分類という考古学的方法と、自然科学の方法をつかって得られたデータを駆使して、土器の生産と供給という考古学上の問題を研究しようとする方向へ向かうものと推察される。土器の形式分類だけでは土器を歴史研究に活用することは困難である。大量に出土する土器を歴史研究の材料として活用していこうとすると、「考古科学」という新しい分野の研究の導入は不可欠であると筆者は考えている。

第２図　家ノ脇Ⅱ遺跡出土須恵器の産地推定

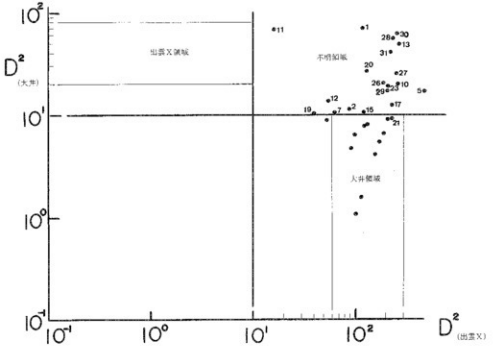


表１　家ノ脇Ⅱ遺跡出土須恵器の分析データ

試料番号	部種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D²（大井）	D²（出雲X）	推定産地
1	蓋	0.333	0.023	2.49	0.445	0.123	0.029	69	118	不明
2	蓋	0.435	0.278	2.53	0.430	0.683	0.293	11	90	不明
3	蓋	0.458	0.204	2.49	0.534	0.551	0.219	1.1	104	大井群
4	坏（高台）	0.528	0.124	1.42	0.695	0.450	0.177	9.3	230	大井群
5	坏（高台）	0.618	0.152	1.20	0.818	0.549	0.306	17	372	不明
6	坏（糸切り）	0.457	0.238	2.56	0.549	0.593	0.263	1.6	117	大井群
7	長頸壺	0.416	0.343	2.07	0.441	0.618	0.356	10	63	大井群（？）
8	高坏	0.475	0.213	1.80	0.609	0.590	0.282	4.3	161	大井群
9	蓋（高台付）	0.432	0.304	2.05	0.499	0.638	0.369	4.6	93	大井群
10	坏	0.507	0.175	2.11	0.718	0.460	0.260	20	262	不明
11	坏（糸切り）	0.344	0.476	3.60	0.278	0.596	0.351	69	16	小明
12	高坏	0.435	0.330	3.39	0.444	0.558	0.300	13	57	不明
13	蓋（把手付）	0.457	0.421	1.19	0.684	0.823	0.490	49	273	不明
14	甕（壺）	0.497	0.234	1.95	0.635	0.639	0.295	6.5	190	大井群
15	坏	0.421	0.280	1.61	0.521	0.717	0.285	10	123	大井群（？）
16	蓋	0.518	0.123	2.11	0.657	0.407	0.209	5.5	176	大井群
17	高坏	0.307	0.269	1.77	0.675	0.664	0.238	12	227	大井群（？）
18	坏	0.373	0.197	2.86	0.420	0.576	0.205	8.8	54	大井群
19	高坏	0.336	0.175	3.07	0.434	0.506	0.189	10	40	不明
20	高坏	0.306	0.121	1.95	0.550	0.439	0.130	27	131	不明
21	提瓶	0.574	0.094	1.95	0.694	0.337	0.146	9.0	231	大井群
22	提瓶	0.451	0.313	2.29	0.581	0.569	0.223	8.1	134	大井群
23	壺	0.463	0.215	1.60	0.656	0.691	0.221	19	209	不明
24	壺	0.423	0.207	2.38	0.571	0.564	0.188	8.0	128	大井群
25	高坏	0.424	0.165	2.35	0.521	0.563	0.202	6.4	100	大井群
26	壺	0.452	0.241	1.52	0.637	0.632	0.234	21	197	小明
27	蓋	0.471	0.227	2.09	0.704	0.530	0.206	26	235	不明
28	壺	0.380	0.131	1.59	0.628	0.312	0.161	56	234	小明
29	坏	0.466	0.209	1.80	0.660	0.543	0.247	17	209	不明
30	坏	0.450	0.309	1.21	0.574	0.968	0.426	61	257	小明
31	蓋	0.444	0.390	1.69	0.589	0.804	0.276	41	223	不明

第6節　原田遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

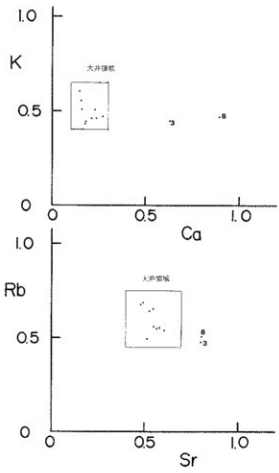
大谷女子大学　　三辻　利一

全国各地の窯跡出土須恵器の分析データから、K、Ca、Rb、Srの4元素が有効に地域差を表す元素であることが見つけられた。この作業に20年を超える年月を要した。地域差はK-Ca、Rb-Srの両分布図上で有効に表示できた。産地問題の研究では「地域差」が基本的に重要な要素となる。地域差を示す4元素の発見と両分布図の活用が産地問題の研究の第一歩となった。

土器の素材は粘土であり、粘土は岩石が地質年代をかけて風化して生成したものである。岩石が多くの元素を含有しているように、粘土にも多くの元素が含まれていることは、その蛍光X線スペクトルやガンマ線スペクトルによって明らかである。多数の試料について、これらのすべての元素を定量分析することは不可能に近い。産地問題の研究ではこれらの元素のうち、いずれかの元素を選択して定量分析することになる。そのために、どの元素が有効に地域差を表すかを実験的に求めなければならない。そのための絶好の分析対象が窯跡出上須恵器であった。

上記4元素にみられる地域差は通常、K-Ca、Rb-Srの両分布図上に表示される。窯跡出土須恵器の分析データは両分布図上でよくまとまって分布する。その理由は良質の粘土が選択的に採集されたからであると筆者は考えている。しかし、同じ窯群内でも別の窯跡から出土する須恵器の化学的特性は類似するものの、ぴたりとは一致しない場合が多い。その理由は粘土の採集場所が異なったことによると考えられる。多数の窯跡から出土した須恵器の分析データをまとめて、窯群の化学的特性が求められる。両分布図上におけるその広がりは1基の窯跡出土須恵器の広がりよりも大きいのが普通である。松江市周辺には多数の須恵器窯跡が発見されているが、いずれの窯跡から出土する須恵器も類似した化学的特性をもっており、これらをまとめて、大井窯群と称している。

第1図　原田遺跡出土須恵器の両分布図



産地推定では消費地遺跡出土須恵器の分析データはまず、近辺にある、同時代の窯跡の須恵器に対応させるのが常識であろう。原田遺跡の須恵器も地元、大井窯群の須恵器の分析データに対応させてみた。

分析結果は表2にまとめられている。全分析値は同時に測定された岩石標準試料、JG-1による標準化値で表示されて

いる。この値から%濃度やppm濃度表示に変換することは可能であるが、標準化値で十分、地域差を比較できるので、いちいち変換しないことにしている。

表2のデータに基づいて作成した両分布図を第1図に示す。比較対照のために、大井領域を示してある。長方形で描いたのは、描き易いためである。当然、その領域は定性的な意味しかもたない。それでも、比較対照には十分役に立つ。第1図より、No. 3、8の2点を除いて、他の9点の試料は大井領域に分布することがわかる。したがって、これら9点の須恵器は大井窯群の製品である可能性が高いと推定されるが、大井窯群への帰属条件を満足しない限り、きちんとした産地推定にはならない。ここで、産地推定のための判別分析にかけることにした。大井群の相手として、出雲国庁跡から出土した須恵器の中に、未特定の生産地の製品と推定される1群の須恵器があったので、これを出雲X群として2群間判別分析を行うことにした。まず、大井群と出雲X群の相互識別の結果を第3図に示す。両群は完全に相互識別できることを示している。第3図より、大井領域はD^2(大井) < 10、D^2(出雲X) = 60 ～ 300であり、出雲X領域はD^2(出雲X) < 10、D^2(大井) = 20 ～ 80であることがわかる。これがそれぞれ、大井群、出雲X群に帰属するための必要十分条件である。もし、原田遺跡出土須恵器の中に大井群産の須恵器が含まれておれば、第2図で大井領域に分布するはずであるし、出雲X群と同じ胎土を持つ須恵器が含まれておれば、出雲X群への帰属条件を満足するはずである。原田遺跡の須恵器を第3図の判別図上にプロットした結果は第2図に示されている。第1図から予想されたように、No. 3、8の2点を除いて、他の9点の試料は大井領域に分布することがわかる。これらの須恵器は大井窯群の製品と推定できる。この結果は表2にも分析値とともに併記してある。No. 3、8の2点の試料にはCa量が異常に多いことが表1からわかる。この理由はよくわからない。ここでは産地不明としておくしか仕方ない。

かくして、原田遺跡には、地元、大井窯群産の須恵器が供給されていることが明らかになった。

第2図　原田遺跡出土須恵器の産地推定（K、Ca、Rb、Sr因子使用）

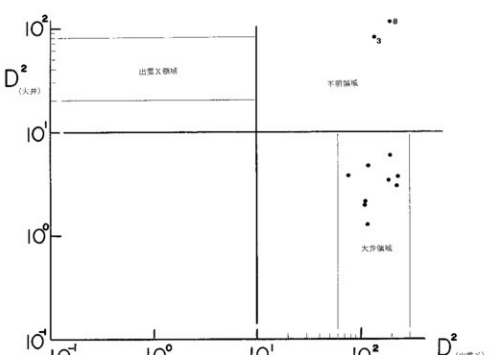
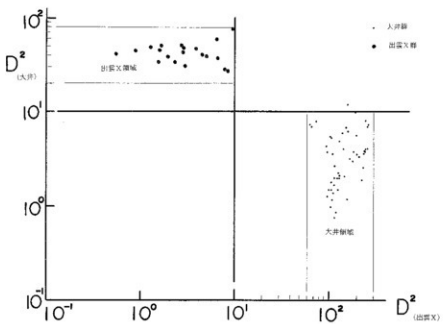


表２　原田遺跡１区出土須恵器の分析データ

試料番号	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2（大井）	D^2（出雲 X）	推定窯跡
1	蓋杯	0.462	0.210	2.69	0.547	0.574	0.240	1.3	115	大井群
2	蓋杯	0.468	0.270	2.52	0.548	0.563	0.235	2.0	112	大井群
3	蓋杯	0.450	0.631	2.13	0.476	0.805	0.344	81	135	不明
4	蓋杯	0.426	0.175	3.03	0.492	0.515	0.211	3.8	77	大井群
5	高杯	0.502	0.234	1.77	0.655	0.550	0.183	6.0	194	大井群
6	はそう	0.554	0.156	1.47	0.692	0.494	0.329	3.6	227	大井群
7	高杯	0.541	0.157	1.63	0.642	0.530	0.303	3.4	184	大井群
8	提瓶	0.474	0.895	2.53	0.571	0.810	0.420	224	190	不明
9	甕	0.440	0.177	2.50	0.559	0.550	0.216	4.8	180	大井群
10	甕	0.458	0.235	1.99	0.541	0.607	0.286	2.0	115	大井群
11	甕	0.606	0.153	1.64	0.681	0.484	0.336	3.0	223	大井群

第３図　大井群と出雲Ｘ群の相互識別（Ｋ、Ca、Rb、Sr 因子使用）



第７節　家ノ脇Ⅱ・前田・原田遺跡出土中世須恵器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所　白石　純

１．分析目的

島根県の斐伊川中流域に位置する仁多町家ノ脇Ⅱ遺跡、前田遺跡、原田遺跡の３遺跡から出土した外面に格子状タタキ目、内面にカキ目が施された中世須恵器の甕が備中の亀山焼および美作の勝間田焼に類似していることから、理化学的手法により胎土分析を実施し、これらの遺跡出土須恵器甕がどの生産地から持ち込まれているのか推定した。また、最近の研究では、山陰地域にもこの時期の窯跡があることが想定されており[1]、この窯跡と考えられる松江市別所遺跡[2]との比較も行った。

２．分析方法

理化学的な分析方法は、蛍光Ｘ線分析法で実施した。この方法は、試料に含まれる成分（元素）量を測定するもので、その成分量の違いから生産地を推定する方法である。また、分析装置の特徴は、分析試料の作製が簡単で、測定も短時間でできるため、多量に試料を分析するのに有効である。しかし、測定試料は均質性が求められるため、分析試料を２ｇほど粉末にする必要があり、破壊分析である。

測定装置は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（セイコーインスツルメンツ製 SEA2010L）を使用し、Si・Ti・Al・Fe・Mn・Mg・Ca・Na・K・P・Rb・Sr・Zr の 13 元素を測定した。

分析試料は、家ノ脇Ⅱ遺跡（甕２点）、前田遺跡（甕１点）、原田遺跡（甕３点）の合計６点である。

３．分析結果

表２の生産地（窯跡）分析値平均一覧表および表３の各遺跡出土試料分析値一覧表から Si（珪素）、Al（アルミニウム）、Ti（チタン）、Ca（カルシウム）、K（カリウム）、Sr（ストロンチウム）、Zr（ジルコウム）の各元素に顕著な違いがみられる。そこで、これらの元素の XY 散布図を作成し、胎土の比較を行った。

その結果、第１図 K-Ca、第２図 Ti-Ca、第３図 Zr-Sr、第４図 Al-Si の各散布図には、亀山、勝間田、別所、東播系（魚住・神出古窯跡群）の各窯跡分布領域が示されており、この散布図に家ノ脇Ⅱ遺跡（甕２点）、前田遺跡（甕１点）、原田遺跡（甕３点）から出土した須恵器をプロットし、産地推定を試みた。すると、各散布図から表１のような生産地に分類された。

表１　各遺跡出土試料の各散布図による産地推定一覧表

番号・遺跡名		K-Ca 散布図	Ti-Ca 散布図	Zr-Sr 散布図	Al-Si 散布図
No1.	家ノ脇Ⅱ	東播系（魚住・神出）	東播系（魚住・神出）	不　明	不　明
No2.	家ノ脇Ⅱ	勝間田、亀山、別所	勝間田焼	勝間田焼	勝間田、亀山
No3.	前田	亀山焼	亀山焼	亀山焼	勝間田、亀山、別所
No4.	原田	不明（勝間田焼？）	不明（勝間田焼？）	勝間田焼	勝間田、亀山、別所
No5.	原田	東播系（魚住・神出）	東播系（魚住・神出）	亀山焼	不　明
No6.	原田	亀山焼	亀山、東播系	亀山、東播系	亀山、勝間田、東播系、別所

（なお、複数の産地に推定されているところは、生産地の分布範囲が重なっているために、複数の推定結果となった。）

表2　各窯跡の分析試料平均値と標準偏差（%）　ただし、Rb・Sr・Zrはppm。

遺跡名	分析点数	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
亀山（1・2・4・11号）	43	67.42±2.27	0.58±0.08	20.45−2.41	5.16 ±0.73	0.02 ±0.01	1.80 ±0.14	0.43 ±0.12	2.70 +0.51	2.06 ±0.37	0.29 ±0.06	221 ±44	70 ±20	236 ±42
勝間田（ガマ2・七十荒尖・糸上谷）	63	67.38±2.48	1.03 ±0.07	19.72±2.04	5.03 ±0.78	0.03 ±0.03	1.66 −0.14	0.51 ±0.09	2.47 ±0.54	1.77 ±0.13	0.13 ±0.03	200 ±39	105 ±16	311 ±30
別所遺跡	47	67.53±1.37	1.28 ±0.06	20.21±0.83	3.75 +0.52	0.04 ±0.01	1.5(±0.10	0.53 ±0.05	2.35±0.51	1.85 −0.14	0.15 ±0.06	172 ±27	124 ±21	356 ±29
神前窯跡群	47	72.63±2.02	1.13 ±0.09	15.46±1.17	5.41 ±0.81	0.03 ±0.01	1.60 −0.07	0.21 ±0.06	2.16±0.19	0.93 ±0.28	0.09 ±0.01	101 ±19	37 ±7.4	333 ±3.
魚住窯跡群	35	70.83±1.35	0.88 ±0.05	17.85−0.8	5.34 ±0.54	0.03 ±0.01	1.64 ±0.06	0.21 ±0.05	2.30 +0.24	1.30 ±0.08	0.05 ±0.02	141 ±7.4	35 ±9	258 ±24

表3　家ノ脇Ⅱ・前田・原田遺跡出土須恵器の胎土分析一覧表（%）　ただし、Rb・Sr・Zrはppm。

試料番号	遺跡名	地域		Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	家ノ脇Ⅱ遺跡	邇	横山層（軟質）	58.53	0.91	18.33	5.10	0.03	2.05	0.24	2.84	1.21	0.58	100	69	406
2	家ノ脇Ⅱ遺跡	夢	頭無層	65.76	1.03	19.70	5.57	0.08	2.09	0.59	2.84	1.96	0.11	238	122	331
3	荒山遺跡	受	頭無層（軟質）	67.31	0.69	21.01	4.02	0.04	1.80	0.58	2.19	2.15	0.08	322	81	244
4	原田遺跡	登	横山層（やや軟質）	67.73	0.86	20.36	4.77	0.05	1.74	0.77	1.63	2.67	0.16	258	133	290
5	屋敷遺跡	姿	瓦質	64.04	0.79	24.45	4.55	0.04	1.89	0.17	2.16	1.51	0.28	167	47	211
6	原田遺跡	邇	横山層（軟質）	68.59	0.82	19.85	3.99	0.04	1.84	0.53	2.27	2.03	0.11	214	73	250

4．まとめ

この蛍光X線分析による胎土分析から以下のことが明らかになった。

(1)家ノ脇Ⅱ遺跡のNo. 1はAl-Si、Zr-Sr両散布図ではどの領域にも入らず、K-Ca・Ti-Ca散布図では東播系（魚住窯跡）に推定された。この結果、No. 1は今回の分析では産地は推定できなかった。また、No. 2は勝間田に推定された。

(2)前山遺跡のNo. 3は亀山に推定された。

(3)原田遺跡のNo. 4は勝間田？に、No. 5はK-Ca・Ti-Ca散布図で東播系（魚住窯跡）に、Zr-Sr散布図で亀山に、Al-Si散布図ではどの領域にも入らなかったことから、この分析では産地がはっきりしなかった。また、No. 6は亀山に推定された。

なお、No. 4はZr-Sr散布図で勝間田にAl-Si散布図で勝間田・亀山・別所に分布したが、K-Ca・Ti-Ca散布図ではどの産地にも入らなかった。そこで現段階で勝間田がもっとも近い産地であると推定されることから、勝間田（？）とした。

以上のように、現在までに蓄積している生産地データとの比較検討では、斐伊川中流域に位置する仁多町家ノ脇Ⅱ遺跡、前田遺跡、原田遺跡の3遺跡から出土した須恵器甕は、家ノ脇Ⅱ遺跡が勝間田に、前山遺跡は亀山に、原田遺跡は亀山、勝間田（？）にそれぞれ推定された。

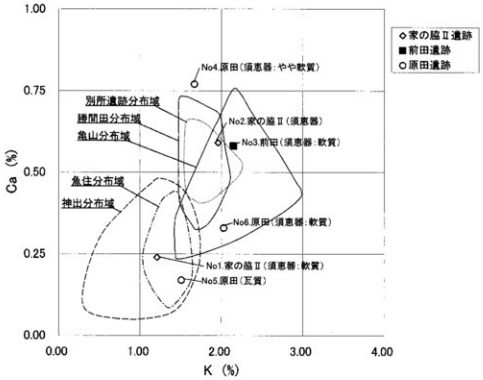
この分析の機会を与えて頂いた、西尾克己氏をはじめ、島根県埋蔵文化財調査センターの方々には、いろいろとお世話になった。また、分析試料の提供では、以下の各機関にお世話になりました。末筆ではありますが記して感謝いたします。

岡山県古代吉備文化財センター、松江市教育委員会、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会

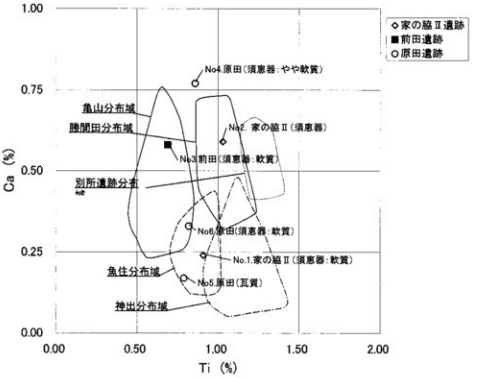
注

(1)『中世須恵器の生産と流通－山陰地方を中心に－』第3回山陰中世土器検討会資料集　2003

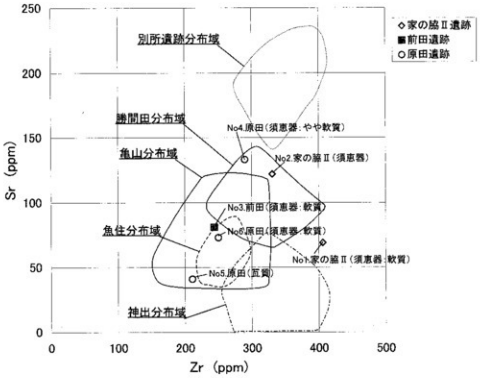
(2)松江市教育委員会『別所遺跡他』1988



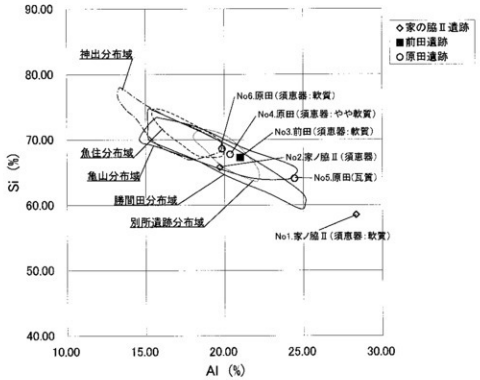
第１図　家ノ脇Ⅱ・前田・原田遺跡出土甕の産地推定（K-Ca 散布図）



第２図　家ノ脇Ⅱ・前田・原田遺跡出土甕の産地推定（Ti-Ca 散布図）



第３図　家ノ脇Ⅱ・前田・原田遺跡出土甕の産地推定（Zr-Sr 散布図）



第４図　家ノ脇Ⅱ・前田・原田遺跡出土甕の産地推定（Al-Si 散布図）

報告書抄録

フリガナ	イエノワキニイセキ　ハラダイセキイチク　マエダイセキヨンク
書名	家ノ脇Ⅱ遺跡　原田遺跡1区　前田遺跡4区
副書名	
巻次	
シリーズ名	尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	4
編著者名	西尾克己・柳浦俊一・松尾充晶・中村唯史・若月利之・三浦聡子・渡辺正巳・三辻利一・白石純
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター http://www.pref.shimane.jp/section/maibun/
所在地	〒690-0131　島根県松江市打出町33番地 TEL（0852）36-8608（代）　maibun@pref.shimane.jp
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
家ノ脇Ⅱ	島根県仁多郡 仁多町大字 佐白前布施	32341		35度 12分 45秒	132度 59分 03秒	2001/04/10 ～ 2001/12/20	4,000㎡	尾原ダム建設
原山	島根県仁多郡 仁多町大字 佐白前布施	32341		35度 12分 55秒	132度 58分 44秒	2002/04/15 ～ 2002/12/25	2,200㎡	尾原ダム建設
前山	島根県仁多郡 仁多町大字 三沢林原	32341		32度 12分 50秒	130度 16分 57秒	2002/08/28 ～ 2002/12/25	1,310㎡	尾原ダム建設

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
家ノ脇Ⅱ	遺物散布地 河道跡	縄文時代 ～中世	集石・土器溜り多数・斐伊川河床跡	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器	古墳時代後期の斐伊川河道跡と土器溜り
原田	古墳・集落跡・遺物散布地・河道跡	縄文時代 ～近世	建物跡・埋設土器・横穴式石室・斐伊川河床跡	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・環頭大刀・馬具・玉類・陶磁器・鉄滓	縄文時代晩期の集落跡・古墳時代後期の古墳・奈良時代の鍛冶遺構・斐伊川河道跡
前田	遺物散布地・河道跡	縄文時代 ～中世	斐伊川河床跡	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器	斐伊川河道跡

家ノ脇Ⅱ遺跡　原田遺跡1区　前田遺跡4区

尾原ダム建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書4

2004年3月31日

編集
島根県教育委員会
発行
国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

印刷
株式会社　島根県農協印刷